哲學研究　第二百七十二號　第二十三卷第十一册

# 形式論理の現實的根據に就いて（承前）

高山岩男

## 六

形式論理は言語に結び付ける原始論理から發展し來り、その發展の仕方は言葉が概念の要具として記號化の傾向を辿ること、換言すれば言葉が言葉の原始機能を失ひ、論理が言語より解放せられることに存する。形式論理は言語の基底より成立しつゝ言語を脱却して行く所に完成するのである。併し言語に結び付ける原始論理も、論理としては存在と思惟との同一を基礎とし、それが更に言表せられ得るとする所にその特徴を保持するものである。そしてこの原始論理も單なる言葉(單語)にでなく、言葉を構成要素とする全體的命題に、存在性と眞實性とを認めるのであつて、言葉に對する命題の優位を出發點の前提とする意味では、原始論理は既に判斷を中心とする論理に達したものと考へることができる。論理は先づ判斷の論理として成立し、進んで推論の論理に達するものと考へることができよう。判

斷は如何に論理的性格を有し來つても、なほ言語の地盤を離れ去ることができない。全く言語の地盤を脱却するとき、論理は推論の論理でなければならぬ。推論性が論理性の中心義をなし、純粋論理の核心を成すものである。

併し翻つて考へてみるに、推論の論理が判斷の論理を飛躍することによつて完成するならば、同樣に判斷の論理は概念の論理を飛躍することによつて完成すると考へることができるであらう。無論嚴密な論理的意味の概念は、判斷と推論とを經過して成立するものとも考へ得るが、命題の言葉に對する優位に判斷論理の成立根據があると同樣に、端的に言葉(エポス)の優位に立つ最も原始的な論理の存在が推定し得られる。古典論理がそれを否定することによつて成立し來る所に、言語に結び付ける原始論理が存するならば、かゝる原始論理が更にそれを否定することによつて成立し來る所に、より原始的な論理、云はば前論理を推定し得るのである。我々はこゝに神話を始め、占卜術や呪術等に支配する一種の思考法を見出し得ると思ふ。命題の聯關に成立する推論に優位を認める形式論理に對し、更に言葉の聯關たる命題に優位を認める言語論理に對し、この思考法を端的に言葉に優位を認める原始論理として特徴づけることもできよう。或はこれを論理的(推論的)思考に對し、更に言語的思考に對し、假りに神話的思考と稱することもできようと思ふ。

占星・占卜・呪術等に支配する特殊の思考法をも、神話的思考の名稱に概括することは、種々の危險を伴ふであらう。蓋し神話は相當高度の精神的所産であつて、低度の占卜や呪術とは異なる意義を有するものであると思はれるからである。神話は決して古代の單純なる民俗信仰と同一視せらるべきものではない。神話學の對象となる神話と、民俗學(エトノロギー)の對象となる民俗とは、決して同一次元の精神的産物ではない。無論、神話の素材となるものは、多く神話構

成以前の民俗信仰の事實より選擇せられたものである。かゝる宗教的事實を離れて神話が宙に虛構せられるといふことはあり得ない。神話の前には宗教的祭儀が先立ちて存する。併し神話は單にばらばらの民俗信仰の事實、宗教的な祭儀行事ではなくして、それらが統一的な思想と構想力とによつて新に解釋され、從つて種々の變容を與へられて、神を中心とする一個の纏つた物語にまで高められる所に神話が成立するのである。神話には長い民俗信仰の外に、明白にそれを統一する思想的要素が存するのであつて、この思想的要素は人生觀や世界觀を含むものであり、これがやがて內容的に哲學の前驅となるものに外ならぬのである。神話と哲學とは形式上相反して、哲學は嚴密な意味に於ては神話からの解放、卽ち神話の否定に生誕するものではあるが、內容上は哲學は神話の含む人生觀・世界觀の純化發展として成立するものである。かく民俗信仰と神話と哲學と間には一種の發展聯關が考へられなければならぬ。更に綿密に考察すれば、民俗信仰と雖もその成立の根柢には旣に原始素材が存するのであつて、民俗信仰はかゝる原始素材の間に自然の選擇、融合、包攝等が行はれることによつて成立するものである。神話に於ける神々の系譜や體系の成立以前には、多くの無秩序に並列する神々があり、これらの神々が固有の名を有する前には更に多くの無名の神性があり、これら無名の神性は宗教的な體驗や行事に於て漸次歷史的に固有の姿を形成し來るのである。瞬間神・特殊神・人格神の神の概念構成の發展經路は(Usener, Götternamen. 1899)、これらの事情を解明しようとする一つの企圖であるが、我々は一般に宗教的な行事體驗に於ける原始素材と民俗信仰と神話との三者に一種の發展聯關を見出し得ると考へるのであつて、神話を哲學の前形式として相當高等の精神的所產と考へたいと思ふ。[1] 占卜や呪術の如きものは、上述の意味に於ては神話以前の民俗信仰に屬するものと考へられる。無論このことは神話成立以後、占卜や呪術が消え去る

ことを云ふのではなく、精神活動の内的な發展構造に於て云はれるのである。併し支那の陰陽五行説の如きものは、神話以前の民俗信仰といふよりも、寧ろ神話構成の思想的原理といふべきであると共に、實は支那の神話であり同時に哲學であるといふこともできる。② そして一般に占星術は哲學以前のものであるが、單に神話と云はるべきものに屬さず、神話と並んで哲學に純化發展すべき前段階のものと見ることができるであらう。

かく呪術・占トや民俗信仰や占星術や神話等、その間種々に區別せらるべきものが存するが、これらを通して共通な一種の思考法が存することは否定できない。そしてこの思考法は決して單に秩序もなく構造もなき亂雜のものではなく、それ自身の中に一つの纏りを有し、一つの統一的構造を有するものである。この思考法も推論を有し、因果律を有する。たゞそれは我々が普通に論理と稱するものに對比するとき著しく異なつたものであり、又形式論理とも意義の異なるものである。この相違は單に形式論理の形式的抽象性に對し、内容的具象性を離れ得ぬといふ如き事柄に止まらず、後に述べる如くより根源的の所に胚胎する。が、兎に角我々が普通に論理と稱するものに對して前論理的といふべき性格を有すると云へよう。我々はこれを一括して便宜上こゝに神話的思考と稱し、この思考の基本特徴を檢討して、それと形式論理との關係を解明し論理性一般の本質を更にこの點から明かにしてみたいと思ふのである。

① これらの詳細な論述は、現在の主題と關係なき故、別の機會に讓る。

② 陰陽五行説が神話と哲學とに對する關係は、支那に於て特に獨自な意義をもつものであつて、神話と哲學との否定的發展の一般的關係をこゝに見出すことはできない。この邊に就いて論述を省くことは、誤解を起す危險があるのであるが、今はそれに支配する思考法が神話のそれと根本的には變りがないといふ點からのみ論述を進める。

上に神話的思考と規定した如き思考法の形式的な根本特徴は何處に存するか。我々はそれを所謂矛盾律の缺如に求めて大過がないと思ふ。神話的思考も無論區別を行ひ、反對對立を知つてゐる。神と人、人と動物、生物と無生物、靈魂と身體、實物と影や像、生と死等、これらの間に區別對立が考へられる。併し神話的思考は同時にそれら兩者の間に嚴密な區別を缺き、區別對立と同時に同一をも思惟し、區別と同一とが神話的思考に於ては融合してゐる。このことは換言すれば神話的思考には矛盾對立を媒介する思考法が支配しないことを意味するのである。

例へば神と人とは區別せられながら、神も多く人間と同樣な生活行動をなすものとせられ、我々と同樣な心的生活を有するものの如く考へられる。神話に於ては多く神さへ肉體を有し、生死あるものと考へられる。神話的思考に於て神の人格性・非人格性の區別は曖昧で判然としない。神は人を超越する者として尊敬せられながら、多く崇る者として畏怖せられる。神々の世界も人間社會の如き組織を有し、神々の間にも優劣强弱の階級があり、戀愛や嫉妬の痴話鬪爭すら存することは、多くの神話に見られる所である。更に生物と無生物との間にも神話的思考は區別を定立はするが、その間に我々が思惟する如き嚴密な對立は思惟せられてゐない。全くの無生物の如き觀念は存せず、無生物と雖もなほ生命を有するものとせられるのである。神話的思考法は、我々が普通に思惟する如くに、神と云へば人に非ざる者、天地山川の自然と云へば生命を有せざる物といふ矛盾對立を媒介せる論理的思考を行はない。從つてまた我々が推察する如くに、神話的思考は神を擬人化するのでもなく、無生物に生命を移入するのでもない。擬人化や生命感情の移入が行はれる程に嚴密な神や無生物の概念が存しないのである。これと同じくまた生と死との關係に於ても、死は多く他の場所への轉生と考へられ、生はまた他の場所からの轉生の如く考へられる。死者と雖も何處かに生

存してゐるのであつて、生死の間に存在と非存在との如き矛盾對立は思惟されないのである。更に神話的思考法には一般に實在性に深淺の段階が存しない。神話人にとつては印象を強く捉へる現存のものが凡て實在であり、實在は一樣のものと考へられるのである。それ故我々の區別する如き實在的・觀念的の嚴密な區別は神話人になく、夢も夢であると同時に現實性をもつものであり、像や影も本物とは異なる像や影であると同時に、本物と同樣な實在性をもつものと思惟せられる。神話人には我々が考へる如き原型・模像の觀念はない。名と雖も人格や物件の單なる符號の如きものではなく、それ自ら積極的な存在性をもつものであり、名は像や影と共に云はば「第二の自己」たるのである。かく單に思考の領域に矛盾對立が存せぬのみならず、行動の領域にも亦同樣に矛盾對立性が支配しないのであつて、現在の我々から見て神話人の行動が不可解に見えるのは、一にこの矛盾對立性の缺如に基くと云へよう。このことは神話の前段階たる宗教的な儀式行事の中に最も明瞭に現れる。例へば行動の模倣が模倣であると同時に、模倣せられる當の本體に成るとせられることは、民俗信仰に多く見られる如くである。

以上の例より判る如く、我々から見れば神話的思考法には所謂矛盾律・排中律が支配しない。そしてかゝる思考法に支配せられてゐる者は、それを何等矛盾とは考へず、また感じもしない。矛盾を矛盾と感じ矛盾と考へるのは、既にかゝる思考法を脱出して、矛盾律の原理に立脚するときだからである。かゝる神話的思考法は矛盾律以前の思考法であつて、未だ矛盾對立を媒介しない思考法である。この意味で神話的思考は前論理的であると共に、それは單なる思考と名付けらるべきものでなく、寧ろ神話的直觀(或は神話的觀方)と名付けられるのが妥當であらう。神話的直觀に於ては、思惟は單に知的なる思惟でなく、同時に情緒的であり行動的である。そこには思惟と非思惟との分化、並

びにその意識が存しないのである。かく神話的直觀に矛盾對立を媒介せる思考が存しないといふことは、無論典型的な神話的直觀に就いて云へることであつて、これは現在の我々が類型構成的所作を爲すことによつて取出したものと云へるであらう。神話そのものは既述の如く相當高度の精神的所産であり、前神話的な宗教的・說話的素材の統一として、そこには既に矛盾律に基く論理的思考が支配してゐることは爭はれない。我々はこのことを無視するものではない。併し神話にはこの論理的思考と並在して、主としてその統一せらるべき素材の中に前論理的な思考法が明白に存するのである。我々はこれを特に神話的直觀としてこゝに取出すのである。このとき神話的直觀の類型的持性は、矛盾對立性の缺如、或は寧ろ前矛盾對立的思考にあると云ひうる。然るに矛盾對立性は論理的な否定に基いて成立するが故に、神話的直觀の基本特性は論理的否定の缺如に、或は寧ろ論理的否定の成立以前に存すると云はなければならぬ。

右は神話的思考を單に形式的な側面から考察したのであるが、同樣の結論はこれを內容的側面から考察しても得られる。この內容的積極的側面は云はば認識に屬するもので、問題を形式論理に限局する我々の當面の課題には重要ではないが、形式論理的思考に對する神話的思考の特徵を解明するために次に少しく觸れて置きたい。

神話的思考には實體の範疇が極めて重要な役割を演ずる。神話的直觀の基礎は實體的思惟にあると云つてもよいと思ふ。無論この實體性は形而上學や近代科學に支配した實體性とは同じではないのであつて、云はば神話的實體性とも稱すべきものであらう。では神話的實體性の神話的性絡は何處に存するか。それは實體と偶有(屬性)の觀念が存せず、寧ろ偶有(屬性)も實體であつて、云はば凡てが實體的のものと思惟せられる所に存する。神話的思考にとつては、

我々が偶有的、屬性的、關係的、現象的、模像的等と思惟するものも、それ自體に於て存在する自性を有するものと考へられる。前に我々は神話的思考に、實物と影像との間、原型と模型との間に、矛盾對立を媒介せる嚴密な區別の存せぬことを述べた。神話的思考は影や像にも、影や像でありながら、なほ獨立した自存的存在性を認めるのである。このことは呪術の如きものの行はれる根據を考察すれば極めて明瞭である。影や像を毀損するとき實物もまた毀損せられると考へられ、影や像は單に本體の模像の如きものではなく、同時に本體の命を宿す第二の本體と思惟せられるのである。影や像は空なる現象や偶有の如きものではない。現象や偶有の思考法は未だ神話的直觀には存しない。同樣の意味で病や罪の如きものも、病人や罪人を離れて獨立な自立的存在性を有するのである。それらは呪術によつて或は拂はれ清め得られ、或は人に憑き得るものとして、人から物に移され、物から人へ移され得られるものとせられる。我々が消極的な缺如態として自存的な存在性を認めず、單に概念的な觀念的存立性しか思惟し得ないものにも、神話人は端的に實體的な實有性を認めるのである。更に呪文や祈禱の場合に明瞭な如く、言葉や名前は自ら働く實體的な力を有するものとせられる。原始的な宗教的祭儀は、その根柢にかゝる神話的實體性の觀念が支配しなくては、到底成立し得る譯はない。かく言葉や名前に自存的實體性を思惟する考へ方は、勝義の神話が形成せられた後も、ロゴスの自存性の觀念として有力に支配し、ロゴスの自發自展の如き神祕的觀念が哲學的思惟にもなほ支配することは、こゝに指摘する必要もなく明瞭な事柄である。更に我々は神話的實體性の範疇が、精神や心の認識にも靈魂の觀念となつて支配し、靈魂は獨立的自立的のものとして、肉體より孤立して存在し得る如く考へられてゐることをも指摘しなければならぬ。そして神話人はその上に、心の諸種の機能を多數の心能力として實體視し、一個の心は澤山の

それぞれ獨立な靈より成るものと思惟するのが普通である。

次に神話的思考の基本に類比の範疇が極めて重要な意義を有することを擧げることができる。陰陽五行說を典型として、一般に占卜術、占星術の根柢に働く範疇はこの類比の範疇である。無論こゝに類比と云ふのは我々が云ふのであつて、神話的思考が類比と意識するものではなく、更にこの類比も我々が思惟するものとは違ひ、神話人にとつては類比は端的に本體的な同一なのである。例へば五行說に於ては天地自然の現象も人事の現象も、萬物は凡て木火土金水の五行に類比的に分類せられ、分類せられた各組のものは、その外見的な相違にも拘らず、深く本體的に同一な宿命に支配せられてゐると考へられるのである。占卜術や占星術の根柢には、何等かの意味で相似や類比のものが、端的に實體的同一であるといふ思考が支配してゐなければならぬ。かゝる立場に於ては人生の出來事は種々なる因果關係の交錯より結果し來るのではない。人生の複雜な出來事も深い根柢に於ては既に始めから決定せられてゐるのである。無論、或る事象を或る類に歸屬せしめる類比の根據は、我々から見れば全く偶然的のものに過ぎぬであらう。が、類比卽實體的同一の觀念に立つ思考にとつては、かゝる偶然性の觀念が生ずべき譯がなく、外見は偶然的の如く見えても、それは本源的には必然的のものと思惟せられてゐるのである。それ故前述の神話的實體性の範疇と結び付けて考へてみるとき、かゝる神話的直觀に於ては、我々の思惟する如き全體と部分との關係は存しないと云へるのであつて、部分に當るものは端的に全體を宿し、それ自ら全體として働くと云つてよい。神話的思考に於ては、部分から全體が出來上るのではなく、全體が部分を所有するのではない。全體は部分に先立つて部分を決定してゐると共に、部分は一個の全體なのである。こゝに於ては我々が區別する部分と全體とは內面的・運命的に融合して居る。部分と

全體との一樣性・無差別とも云ふべき性格が、神話的思考の一つの特性をなす。このことは神話人の行動をもそのまま規定してゐるのである。

これに關聯して更に神話的思考に於ける因果關係がまた獨自の構造を有することを指摘することができる。神話は神々の物語として、神々の系譜を語り、宇宙人類の創成を語り、生死や罪の起源を語る等、その前神話的な素材の統一的構成の中に既に解釋や說明の要求を含むものである。この意味で神話には因果關係の思惟が支配してゐると云つてよい。併しながら神話的思考に於ける因果關係は我々が因果律と稱するものとは全く構造を異にしてゐる。神話的思考は一般に或る事象を說明するのに神の人格的な意志活動をその原因としてもち來る。神話の因果關係は多く目的行動的である。そしてこの原因と結果とは一般的な法則性の意義を有するものでなく、或る結果には特定の原因を思考するのが普通である。換言すれば神話の目的論的な因果關係は、目的的意圖に結合する當然の歸結として、一回限りたる性格を保有するのである。かゝる立場より自然現象も人類の歷史も、神の意志による決定として、一回限りの事件の繼續と考へられるのが、一般に神話的思考の典型的な因果關係の形であると考へることができる。

上述の諸種の神話的範疇に就いて、それらに共通な神話的特徵は何處に存するか。これを我々は論理的な否定の缺如に考へ得ると思ふのである。

先づ因果關係に就いてみるに、神話的思考では、今・茲の出來事は均しく今・茲の原因で說明せられるといふ構造を有してゐると思はれる。裏より云へば今・茲の個別的な出來事が、今・茲のものならざる、換言すれば一般的なものを媒介して說明せられるといふことがないのである。然るに何人も知る如く、今・茲の事象を今・茲ならざる一般的のも

のより說明するのが科學的思惟の特徵であつて、このことは個別を一般的法則の特殊(類例)として理解し說明することに外ならない。かく科學的思惟が個別を一般より理解するに對し、寧ろ個別をそのまゝ他の個別より理解しようとするのが神話的思考法の特色をなすと云へる。神話的思考が神の個別的な又目的的な意志活動を考へざるを得ない根據は、實に個別を個別から理解しようとする思考構造の中に存するのである。そして科學的思惟がこの點に於て非人格的な法則を立て、目的的人格意志の觀念を否定して、現實の事象を理解しようとするのは、逆に個別を個別ならざるもの、卽ち個別の否定を媒介して理解しようとする態度より必然的に歸結するものと考へることができる。科學的思惟は今・茲の直觀的・具象的なものを、今・茲ならざる非直觀的・抽象的のものを、卽ち非有或は無を媒介して理解しようとする所に根本の特徵を有する。然るに神話的直觀はかゝる非有或は無を媒介する思考法を知らないのである。神話的思考はどこ迄も直觀的・形象的・具體的である。そしてかゝる非有或は無は有に矛盾對立する有の否定に外ならざるが故に、神話的思考の基本性格は否定の缺如にあると云はなければならぬ。否定に基く矛盾對立こそ、更に非有或は無を媒介する思惟こそ論理性の根本義をなす。矛盾律はこのことを現してゐる。科學的思惟は論理を媒介せる思惟であり、神話的思考は未だ論理を媒介せざる思惟である。

同樣のことが類比卽同一の神話的思考に就いても、更に神話的實體性の思考に就いても云へることは明かであらう。類比が端的に本體的同一と思考せられる所以は、畢竟するに部分と全體との間に否定の無を媒介せる思惟が存せず、機能的な全體性の思惟が存せざるに基く。神話の實體的思考は實體と偶有、實物と影像、原型と模型、本體と現象等の間に否定の無を媒介する思惟が未だ支配せざるに基く。前に神話的思考は本來實體論的思考であると云つた如く、

實體性の範疇による思考が本來神話的なことは、近世科學の範疇が實體概念より漸次機能概念へ推移發展し來つた事實で明瞭であり、①この意味で類比卽同一の思考に立つ占星術の如きは、一步神話的思考を脫して科學的思惟に近いものを有すると云ふことができる。何となればこの思考には實體が直接に立てられることなく、寧ろ實體は否定されてゐるからである。自然科學の發達がその起源に於て占星術に結び付ける理由も茲から理解できよう。②占星術的思考は既に一つの法則的思惟を遂行してゐる。併しながらその法則は、たとひ一般性を有し、個別をその類例として限定するにせよ、なほ「何」を主題とする構造法則であつて、「如何に」を主題とする科學的法則とは意義を異にする。占星術的思考の立場では、事象を如何に細かいものに分解しても、部分は常にそのまゝ全體の構造を有し、全體の運命を荷ふものとせられるのである。換言すれば構造上の類比が端的に本體的同一とせられてゐるのであつて、その間に否定の媒介は存しないのである。同樣に神話的實體性は形而上學の實體論的思惟の前驅であつて、實體論的思惟は未だ完全な否定的・論理的思惟の立場に立つものとは云へないが、形而上學が兎に角否定を媒介せるに對し、神話的實體性は未だ全くこの否定性を有せぬのである。典型的な神話的思考はかゝる立場を通つて要素論・原子論の如きに進み、やがて科學的思惟に發展するものと考へられるが、要するに神話的思考法の基本特徵は一般に無を媒介せる思惟の缺如、卽ち論理的否定の缺如或は未發現に存すると思はれるのである。

① これと同樣の經路は、アートマンを否定して、實體論的思惟に替へるに緣起の機能的思惟を以てした佛敎の中にも見出される。この意味で佛敎は極めて理性的な認識の立場に立つと云へる。

② 前に支那の陰陽說、五行說が、特殊な地位を占めることを注意したのも、ここに關係する。

## 八

神話的直觀は決して無構造、無秩序のものでなく、一定の構造秩序を有するものである。そしてこの構造秩序を決定する中心的のものが、上に述べた如く、現存するものを現存せざるもの、卽ち非存在や無を媒介して理解するといふことがない所に存するのである。否定の媒介が存せぬ所に神話的直觀の基本特性が存する。神話的思惟が矛盾對立性を缺き、從つて矛盾律以前の前論理的性格を有する所以はこゝにあると思ふ。我々は前に言語的論理が判斷に、形式論理が推論に優位を置くに對し、神話的前論理は寧ろ名に優位を置き、こゝにこの前論理の特質を認めようとした。無の媒介を缺く神話的思惟の特徴は名辭の構成にも判然顯はれてゐると思ふ。

如何なる言語的概念も、その根源に遡つて行けば、神話的のものから始つてゐるとも云はれる如く(Usener, Götternamen. S. 375) 神話的概念構成は一般に概念構成の解明に重要な意義をもつと思ふ。神話的直觀の世界に於ては、名はそれ自ら實體的な自存性を有するものであり、名付けられる物や人や神の「もう一個の自己」の如く思惟せられるものであつた。併しかゝる名や命名が成立するに至るまでの基礎は何處にあるのであるか。ウーゼネルが『神々の名』に於て宗教的概念の構成に就いて試みた、瞬間神、特殊神、人格神の系列は、この點に多くの示唆を與へる。彼は命名の基礎を、心の昂奮狀態に於て與へられる感性的印象の中から、最も生々としたもの、換言すれば偶然的でなく一回的でなく、斷えず繰り返されてくる本質的のものが、自から音聲を伴つて顯はになる形成活動の中に見出さうとした。無論この生々とした本質的な印象を如何に捉へるかには民族の心の差違が存するであらう。同じく月にしても、或る民族は光り輝くといふ點より捉へ(羅 luna)、或る民族は週期的に繰返される盈虧から時を計るといふ觀點で

捉へた(希 ἕν)。が、一般に瞬間的な現前の印象の中から、最も强烈に民族の心を捉へる印象が自ら選擇せられて、それが一般名辭に音聲化せられ形成せられて行くことは否定できない。神話的な命名の働きは決して直觀を擴大するものではない。寧ろ直觀を重要な一點に集中し凝結せしめるのである。このことは言ひ換へれば神話の概念構成は量よりも質を中心とし、外延よりも內包を中心とし、現前の印象中より全體を却つて生々と顯はにする特性を捉へる働きであると云へる。そしてこれは畢竟神話的直觀が現前の印象を否定し、印象に現前せぬ無を媒介して概念を構成することがないといふことを現すのであつて、神話的思惟の前述の特徵に副ふ事柄に外ならぬのである。

言語的な概念構成は神話的な命名の特性をその儘備へてゐる。言葉も直觀に現前する印象の最も强烈なものを捉へて形成されるのであつて、他と比較の結果、共通の特徵を捉へることによつて作られるものではない。言葉は比較によつてではなく、寧ろ選擇によつて成立するのである。言葉の單數が同時に複數を意味する言語で明かなやうに、言語的思惟の中にも神話的思考と同樣に、類例が同時に類と同一視せられる觀念、所謂 pars pro toto が働いてゐる。この點で言語形成の根柢は比量的・分別的思惟と判然對立する。論理的な概念構成の基本特色は、個々のものを機能的な全體性を表出し、その中に一定の體系的地位を占めるものとして捉へ、この全體性を直觀的・具象的なものから抽象や捨象に於て捉へる所にある。論理的概念の要求する意義の一義性や嚴密性、或は可能的な包括性はこれに基いて成立するのであつて、言語的概念が直觀的・內包的・印象選擇的であるに對し、論理的概念は記號的・外延的・印象捨象的たることを本性とする。このことは論理的・比量的思惟の本性が直觀性・印象性・具象性の否定の働きにあることを現すのであつて、この否定の働きが、現前せぬ非存在、卽ち無を媒介する働きに外ならぬことは云ふまでも

ない。言語的概念構成は例へば分類の働きの如きものに於て既に神話的思考の立場を脱し、神話的命名活動と論理的概念とを媒介すると考へることができる。無論名詞の性別をもつ言語で、それが半ば神話的、半ば感性的な根據より決定せられる如く、言語に於ける分類の働きにも強く神話的直觀が支配するが、接頭語や接尾語による分類の如きものには既に論理的・比量的思惟に近いものが存するであらう。要するに否定を缺く神話的な概念構成は、言語の分類などを媒介して、否定活動を基礎とする論理的な概念構成に進み行くものと考へることができる。こゝにも神話的前論理と言語的論理と形式論理との系列聯關が見出される如くに思ふのである。

右の言語の概念構成に於ける特性把握や、それに含まれる分類の働きが、嚴密な論理的概念構成の前段階をなすことは、數學的自然科學の知識に對する生物學の形態記述や分類的知識を考へるとき、一層明瞭となるであらう。形態學に於ける形態記述の中には直觀的な特性把握が主導的地位を占めてゐるのでなければならぬ。その知識は言葉の構成と直ちに同一ではないが、なほ言葉の構成に於けると同樣な內包的なる特性把握を基礎とするのである。植物學や動物學に於ける分類的知識の如きも、本質的な特性把握を基礎とすると共に、それを比較的抽象の働きに結合する所に成立するものと思はれる。そしてこれらの知識が科學的知識として未發達不十分のものと考へられるのは、科學的知識の理想が數學的自然科學に代表せられるやうな論理的概念構成に存するからである。生物學的知識には直觀的・事實的・經驗的のものを非直觀的・非事實的・非經驗的のもの、卽ち無を媒介して新に規定する嚴密な論理性がない。かゝる論理性は記號的な概念構成の立場で眞實に達せられるのである。

精神科學に於ける類型理解の知識は、決して右の言語に於ける特性把握や生物學的な形態比較の知識と同一視せら

るべきものではないと思ふ。我々は今かゝる認識の本質を論じ得る立場に立つてゐないので立入ることを避けねばならぬが、精神科學の認識に基礎的な類型構成の立場は、單なる論理的立場と異り、それを媒介して特性把握に復歸した高次のものであると思はれる。それは論理以前の立場の事ではなく、既に一般法則定立の論理性を媒介した立場の事柄である。個別を一般の類例として觀念的のものより事實的のものを說明する論理の立場は、遂に現實の歷史的・社會的な事象を理解し得る立場ではない。こゝに新に論理を媒介しながら現實の事實を理解する高次の立場が要求せられるのであつて、精神科學の類型構成的所作はかゝる立場に成立すると思はれるのである。

## 九

論理性の根本義をなす否定性を明かにするために、我々は寧ろ否定性を缺き、否定性以前のものたるべき神話的思考、及び言語的概念構成の特色をば解明しようとした。次に論理の否定性そのものを積極的に解明しなければならぬ。否定性は非有或は無の媒介によつて成立する。かゝる非有の最も判然と定式化せられるものが所謂矛盾對立である。論理は矛盾對立性を基礎とするものである。矛盾對立性を基礎とせぬ思惟は論理的思惟とは云へない。否定・非有・矛盾等は何等かの意味で論理性の根本に係るものでなければならぬ。これらの事柄を我々は如何に解すべきであるか。

否定は論理の原始現象であり、矛盾對立性は論理が以て立つ基礎原理である。然るに論理性に否定が第一義的のものでなく、矛盾對立が論理の原始現象に非ずとする立場がある。矛盾對立(Antithesis)に對し寧ろ異他對立(Hetero-thesis)を論理的原始現象とするリッカートの立場がさうである(Rickert, Das Eine, die Einheit und die Eins. 1912.)。

この思想は一般に客觀論理主義や存在論的立場が必然的に直面する歸結であると思はれる。我々は先づこの思想を批評することによつて、論理の否定性の解明に入りたいと思ふ。

リッカートによれば純粋の論理的對象は、「或者と他者」(das Etwas und das Andere)、或は簡單に「一と他」(das Eine und das Andere)である。これが最小限度の論理性、卽ち「純粋論理的對象性のミニマム」である。これは云ふまでもなく異他對立であつて、リッカートによれば否定に先立ち、否定より根源的である。何故と云ふに、もし否定が根源的ならば、或者の否定は無なるが故に、論理的對象は畢竟消失するからであり、更に否定は元來肯定を豫想するが、この肯定・否定の對立は、實は異他對立に外ならぬが故である。卽ち異他對立は否定より根源的であり、矛盾對立に對して優位をもつ。無は他者の特殊な場合に過ぎず、論理的對象の客觀的領域に否定は存せず、否定は必要ではない。「一と他」で純粋論理的全體が構成せられる。異他對立は論理性の原始現象である。一と他の「と」は明瞭な差別をもつ「一」と「他」との綜合的統一であつて、區別を保ちながら綜合し、綜合しながら區別を保つ所の「結合に於ける分離の關係」である。異他的に對立する「一」「他」の關係項に對し、「と」は純粋論理的關係或は論理的關係一般を現し、「一」「と」「他」の三者が論理的原始現象を構成する。それ故矛盾對立を論理の原始現象とすることは誤謬であり、それによつて成立する矛盾對立的な辨證法や、否定による概念の自己運動の如きを說くヘーゲル主義は誤謬であると云はなければならぬ。

右の如く異他對立を論理性の原始現象とするリッカートの思想は普通の思想と著しく異なり、無の媒介を缺く直接的な神話的直觀に對し寧ろ無の媒介に基く否定の廻り路を論理的思惟の基本特性とした上述の考と甚だしく異なるも

のである。我々はかゝる思想を批評する前に、寧ろかゝる思想の成立し來る根據を明かにする方が肝要である。そのときかゝる思想は一般に論理を始めから認識論的立場より考察しながら、而も純粹論理的のものを主觀の思惟から解放せられた客觀的な意味の世界に歸屬せしめようとする要求に、換言すれば認識論的立場に於ける客觀論理主義の要求に成立することが氣付かれると思ふ。かゝる認識論的立場の基本特色は、論理を始めから論理の中より解明し、論理を神話的乃至言語的思考の如き前論理の根據より解明することをなさぬ所にある。この立場にとつては論理的認識が端的に與へられた原本的事實であつて、その現實的根據を問ふ如きことは全く無意義なのである。それ故この立場にとつて論理的に對立するものは端的に心理的であり、論理主義に對するものは心理主義である。そして論理主義なるものは心理主義から解放せられなければならぬとする。判斷からは判斷作用を、思想からは思考を排除して、純客觀主義に立たうとするのが、その主張する所である。然るに論理主義は始めから心理的なるものを、時間的・經驗的・個人的・主觀的のものとなし、論理そのものには有つても無くとも差支なき偶然的のものとなすのである。然るに判斷作用や思考の如き心理的事實が一體論理主義の考ふる如き機械的のものであるか否かが疑問である。我々は寧ろ論理主義の考へる心理的なるものは、全く論理に反對對立のものとして既に論理的に構想せられたものに過ぎず、人間の心理的事實の理解に於て全く誤れるものであると思ふ。客觀的論理主義は論理を以て人間なくとも妥當するものと考へるであらうが、それは眞善美の如き人間性を內容とするィデアを、超個人的であるが故に超人間的であると考へ、我々人間の作れる機械を個人主觀を離れて存在するが故に自然と同一視するのと、全く同樣の誤謬であるに過ぎない。論理は如何に客觀性を要求しても思惟主觀一般の對應と協同とを脫することはできない。論理に無を媒介する思考を

根源的に非ずとし、論理より否定を排除し去らうとする論理主義の立場は、實は以上の如き根據から成立し來るものに外ならぬと思はれるのである。

無とは客觀的に存在せざるものである。純粹な客觀的論理の領域に無が存し得る譯はなく、無を媒介する否定の活動が入り得る謂はない。否定が客觀論理の立場より排除せられるのは當然である。客觀論理の立場と存在論の立場とは根本的に相通ずるものを有する。リッカートが存在を原述語(Urprädikat)として「述語の論理」を主張し、かゝる存在に實在的・理想的・超感性的・妥當的の四種を區別して、存在論と論理とを結合しようとしたのも當然であると思はれる(Rickert, Die Logik des Prädikats und das Problem der Ontologie. 1930)。そしてこのことは無及び否定が單なる客觀の領域にでなく、主觀と客觀との聯關に支配し成立することを現すであらう。更にこのことは所謂矛盾律を原則とする論理が反省の立場に成立することをも現すであらう。然るに反省は思惟の根本機能であると共に、決して論理に偶然的・外面的・附加的のものではなく、論理は反省を必然的に含み、反省に內面的に維持せられる全體である。かゝる立場で始めて無の媒介或は否定が、論理に根源的な原始現象であることが正當に承認せられるのである。

更に翻つて「一と他」の異他對立そのものを考察するに、それは實は既に無の媒介や否定を基礎として成立するものでなからうか。周知の如く、ヘーゲルは「或者と他者」の範疇を「定在」(Dasein)の範疇下で說いてゐる。定在は限定的な存在である。然るに限定は、スピノーザの凡ての限定は否定であるといふことよりも明瞭な如く、無を媒介することによつて成立するのである。從つてヘーゲルに於ても定在は有と無との、存在と非存在との綜合であるとせられる。かゝる定在の限定性が取出され、それが存在するものとせられるとき、ヘーゲルでは「質」の範疇が成立するも

のとせられ、從つて質は常に實在と否定との兩契機を含むものとせられる。かゝる質の區別を媒介した定有が「或者」である。「或者」は定有自身の質的限定態である。「或者」の否定は「他者」である。が、「他者」も直接には一個の「或者」であり、「或者」は「他者」に對して「他者」である。換言すれば「一と他」は相互に「一と他」である。故に「或者」は一方自分自身たる自體性の契機を有し、而も他方他の爲に存する對他性の契機卽ち限界性を有する。かくて「或者と他者」の範疇は新に「有限性」の範疇に移らなければならぬ。

右のヘーゲルの論理にも見られる如く、異他對立の根柢に既に無の媒介と否定が存することは、どうしても否み難いと思ふ。異他對立それ自身は矛盾對立ではない。異他對立と矛盾對立とは別個の範疇でなければならぬ。併し異他對立それ自身の成立根據を探るとき、それは既に無の媒介なくして成立することが不可能である。無の媒介卽ち否定は矛盾對立そのものではない。無論、無の媒介に基く否定的思考は、矛盾對立の形式に最も明白に現れるであらう。併し矛盾對立も實は無の媒介に基く否定的思考を俟ちて成立するのである。無の媒介卽ち否定は矛盾對立をも異他對立をも共に成立せしめる根本制約である。無の媒介こそ論理的思考の原始現象であると云はなければならぬ。ヘーゲルの論理學に於ても否定は論理的範疇ではなかつた。彼に於て否定性は論理そのものの根源的原理である。否定は無の媒介活動でなければならぬ。一切の論理的思惟も論理的範疇もかゝる意味の否定を基礎とせずしては成立しない。所謂矛律を基本原則とし、排中律を確持する形式論理は、かゝる無に基く否定の根據に成立する。無論この否定性は獨り形式論理を成立せしめるものに止まるものではなく、無は形式的な矛盾對立に終止するものではない。が、兎に角形式論理は無を媒介する否定活動をその根據とすることによつて成立するのである。

## 十

論理性の基本性格は無の媒介にあり、論理性の原始現象は否定性にある。これが前論理的な神話的直觀に對する論理的思惟の特色をなすのである。我々は論理的思惟に於て無に直接する。無は論理的思惟の中に既に顯現してゐる。論理性の發現は無の顯現でなければならぬ。神話的直觀より言語的思考を通つて論理的思惟に進むことが、人間精神の發展と云ひ得るならば、それは無の發現、無への直接の進展と云ふことができる。無は如何に規定せらるべきであるか。我々はもう少しこのことを論じて置かなければならぬ。

論理的思惟の基本特徵は、既に論じた如く、與へられた存在をそのまゝ現前の存在としては受け取らず、それを常に現前には與へられないもの、卽ち無を媒介して新に受け取る所に存する。現前の存在を一般の特殊として理解する論理的機能は、この無の媒介を俟ちて成立する事柄でなければならぬ。然るにこの無は無として何處にも自存的・實體的に存在するものではない。無は存在ではなく無である。無自體の如きものは思惟することが許されない。無は非對象的・非實體的であり、考へられるものでなく、寧ろ考へる思惟の活動に卽して顯現する外ない。無は無とし、否定する否定の働きそのものでなければならぬ。この否定活動も定立せられゝば、肯定に對する否定として、一個の存在的のものに化し去るであらう。そのとき無は既に逃れ去り消え去つて、却つて否定・肯定の對立を成立せしめる根源的な否定活動そのものに移つてゐる。無は卽ち單に否定の働きそのもの、絕對否定の活動に外ならぬのである。それ故次に、この否定の働きそのものに外ならぬ無は、自己自身を積極的に定立するものではないが故に、常に存在に卽する存在の否定としてのみ顯現する。無は非有或は非存在としてのみ現れる。無は實際には「非」である。非有

は無限定的であり、非有は表象することを許さぬ。こゝに無の顯現がある。非としての無は有に卽する有の否定として、媒介の活動そのものである。無は媒介せられるものでなく、媒介するものである。かく無は有に卽する絕對否定の活動そのものであり、有に卽する否定的媒介の活動そのものであると云はなければならぬ。

無は右の如く規定せられる。そしてかゝる無が論理性の原始現象をなす。前に論理性の根本義を推論性に見出した我々は、新に論理性の他の根本義を否宗的媒介性に見出し得るのである。そして推論性も根源的には否定的媒介性に基くことは明かである。否定的媒介性が論理の最も根源的な原始現象である。一切の論理的思考は否定的媒介の活動である。論理性そのものは何處にも自存的に存在するものではない。理論理性も實踐理性も、現實の存在に卽する否定的媒介の活動であつて、目的的自存的存在でない如く、論理性も現實の有に卽する否定的媒介の活動であつて、寧ろこの論理性が理論理性と實踐理性との理性的性格を形作るのである。かゝる論理性が最も良く顯現する定式が先づ矛盾對立であり、次に一般・特殊の形式である。形式論理はかゝる原理に立ちて、恰も數學や幾何學の如く、一切の現實的存在の內容性を抽象し無視する形式性の立場に成立するものに外ならぬ。

併し矛盾對立そのものが既に明示してゐる如く、論理性は有に卽するその否定を媒介する所に成立するのである。換言すれば有なき所に論理的な無が顯現し得ることはできないのである。論理的思惟の對象は非有を媒介せる有である。非有を媒介せぬ有は論理的思惟の對象とはならない。思惟の對象は依然として有である。たゞそれが論理的性格を有する所以が、無の否定を媒介せる所に存するのである。そしてこのことは實は論理が常に、未だ否定を媒介せぬ前論理的存在をば必要とし、かゝる前論理的存在に卽して始めて自らを論理として顯現することを意味すると思ふ。

論理的思惟の對象たる甲は非甲の否定的思惟を媒介して始めて定立せられる。自同律は矛盾律を媒介して始めて眞實に完成するものと云はなければならぬ。無論かく云へば、非甲の否定的思惟が成立するためには、既に甲の存立が豫想せられなければならず、矛盾律は實は自同律を前提して成立するものであるとも云へるであらう。併しながら非甲の否定的思惟が成立する場合、その卽する所與としての甲は未だ論理的思惟の對象としての甲ではないのであつて、未だ論理的思惟の內部に存せずして、單に現前に存する實在なのである。かゝる實在の實在性を證得せしむるものは、論理的思惟ではなくして身體的行動に於ける抵抗の經驗である。かゝる實在は未だ前論理的である。論理的思惟は現前のものを現前せざるものを媒介して思惟する働きとして、この前論理的實在に卽して、その否定を媒介しつゝ前論理的實在を新に思惟し、こゝに前論理的實在を論理の內部に包攝する所に成立するのである。かくて前論理的實在は論理化せられ、論理的思惟の對象となる。自同律の主語甲はかくて成立するのでなければならぬ。この意味で論理的思惟の對象は既に自覺の對象であると云ふことができ、それは前論理的實在と論理的な否定的思惟との綜合として成立するといふことができる。かゝるものが現實である。現實は單なる實在と異なり、否定的な論理的思惟の活動を媒介せるものである。簡單に云へば、實在の單に客觀的なるに對し、客觀的・主觀的のものである。論理性は現實の構成契機である。かゝる意義を有せぬ論理はない。

實在は反省的なる論理的思惟以前の直接的のものである。實在は前論理的である。而も論理的思惟は常にかゝる前論理的實在の所與なくして顯現することが許されず、かゝる前論理的實在に卽してのみ顯現し得るのである。それは波が常に水の波として、水を離れて波があり得ぬのに比し得るであらう。併しまた波をなさぬ水が存せぬやうに、全

く論理的思惟を媒介せぬ裸の前論理的實在も現實には存せぬのである。前論理的實在は常に否定的な論理的思惟を媒介して、論理的思惟の積極的對象となり、現實の構成內容となる。かゝる論理的思惟の積極的對象となれる實在、これが「特殊」に外ならない。そしてこの特殊を含みつゝ否定的な非或は無をも包む全體が「一般」と思惟せられるものに外ならぬのである。それ故論理的思惟は常に實在に卽する思惟であると同時に、實在ならぬ無をも思惟する一般的思惟である。判斷の主語となり、推論の小語となるものは常に實在的のものである。この實在性は論理的思惟の確立し得るものでもなく、況や生產し得る如きものではない。併し判斷の主語や推論の小語は單なる實在でなく、同時に論理的思惟の對象として論理化せられた特殊である。かく論理的思惟の對象は一面前論理性より來る實在なると共に、他面論理性より來る特殊である。そしてこの前論理的實在を論理的特殊に轉ずる働きが、無を媒介する否定的思惟の活動そのものに外ならぬのである。

我々は實在と論理と現實との關係を以上の如く捉へなければならぬと思ふ。論理は實在と現實とを離れて、空に自存し存立するものではない。論理は飽くまで否定的媒介の活動そのものである。無論、幾何學が凡ての空間を平面に還元して考へ、力學が水を離れた波の形のみを研究する如く、實在の內容を離れて論理的思惟の形式のみを考察することも可能である。形式論理學はかゝる所作を經て成立するものでなければならぬ。併しこのことは論理的思惟が實在との必然的な相卽を離れても存立し得ることを意味するものではない。論理は實在に相卽してのみ存立する。こゝに論理の威力と制限とが存するのである。

我々は形式論理の根據を求めて言語の對話や論證に見出し、次に神話的直觀と對比することによつて形式論理の特

性を否定性に見出した。簡單に我々は形式論理の形式性の根據を言語の中に、論理性の根據を否定の中に求めることもできるであらう。併し形式論理の根據を明かにした我々は更に進んで、この根據が如何に論理の内部に於て働き、論理とその根據とが立體的な關係を有するかの問題に直面するのである。この問題に對する解決の原理は、既に否定の活動が前論理的實在を論理的對象に轉ずると共に、論理的對象が否定的思惟に媒介されながら、常にその實在性の根據を前論理の領域に仰ぐことを解明した事柄の中に、暗示されてゐると云ひ得るであらう。こゝに實は論理の辨證法的性格が現れてゐるのであるが、これを主題的に問題とすることは、また別稿の論述に讓らなければならぬ。（完）